

## 「この町には、わたしの民が大勢いる」

### 使徒言行録18章1節～11節

「この町には、わたしの民が大勢いる」。この言葉は、パウロが、多くの困難な状況の中から、コリントの町での伝道活動で与えられた神様の言葉です。パウロが、あの道徳的に荒れ果てたコリントの町に、神の民が大勢いるという確信と幻を与えられ、彼の伝道旅行では特別な、一年六ヶ月という期間、腰をすえて伝道しました。パウロのコリントでの伝道活動は、客観的に見るならば、その地で教会が形成されるという見通しは殆どありませんでした。けれど、その状況の中で、パウロは、この神様の言葉に押し出だされて、コリントの町で伝道したのです。

さて、私達が教会で伝道活動を続けていく時、自分がキリスト者だということから、何か特別なことを行なうようなイメージを持つかもしれません。或いは、伝道活動を行なうということは、教会が、ただ早く大きい教会になりたいからだと思うかもしれません。しかし、そのようなことではなく、もっと本質的なものなのです。福音によって生かされている教会。或いは福音によって新しく生きるキリスト者というのは、自らその内に伝道的活力を持っています。ですから、私達が礼拝で唱える信仰告白の中にありますように、「教会は公の礼拝を守り、福音を正しく宣べ伝える」のです。単に、教会が大きくなるために、ということでは決してありません。教会の本質の問題です。教会の伝道意欲が失われているということは、病んでいる教会で、やがて死に絶えていく教会の姿です。それが、大教会であろうと、小教会であろうと同じことです。

それは、二つのことから見ることができます。教会はキリストの体なる教会です。マルクマイオンというお医者さんの言葉に、「人間の死とは何であるかという、それは、初めと終わりを一緒にもたすことが出来ないときである。」とあります。私達の体の細胞は毎日毎日何十万と滅び、同時に又、同じくらいの細胞が新しく形成されていくと言われます。従ってもし、十年後に友人に出会ったとしても、そこには十年前の友人はすでに無く、全く別な人がいるということになります。なぜなら、十年前の体の細胞は一つも所有していないことは確かであり、そのように、器官的にみるなら、全く新しい人間になってしまっていると言うのです。それほど人間は新陳代謝が激しく、「死んで生まれ」て行く。それが、生きているということなのです。従って、人間が生きているということは、絶えず初めと終わりとを結びつける努力なのだ。もし、それが出来なくなった時、或いは、それを止めてしまった時、死を迎えます。人間の体が死を迎えるということは、体が小さくなってなくなる時ではなく、大きい体は大きいまま、小さい体は小さいままに、初めと終わりとが結びつかなくなった時に死を迎えるのです。

教会も同じことが言えます。教会が大きいとか、小さいとか、創立以来何年経ったという事は問題ではありません。教会が生み出す力、常に初めを失った時には死んでいるのです。その意味で、教会が伝道力を失った時、伝道的活力があふれて来ない時、それは、教会の生死に関わる本質の問題なのです。またこの事は、個々の信仰生活においても同じことが言えます。

もう一つの点は、教会は、神様からこの世に使わされた民であることを忘れてはならないということです。つまり、教会の伝道は、教会のためにあるのではないのです。教会の力を世に広げる

ためにあるのでもありません。むしろ反対なのです。伝道のために選ばれた群れこそが教会であり、教会は、神さまの聖名のために、神様の伝道の業に奉仕する民として選ばれた群れということです。

旧約聖書のイスラエルが神様の選びの民であるという時、イスラエルはイスラエルの為には選ばれたわけではありません。エゼキエル書36章23節に、「わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされるとき、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主なる神は言われる。」と記されています。すなわち、イスラエルを選んだのは、イスラエルを通して全ての国民が主なる神こそが真の神であることを知るためであると言っているのです。これを教會的に言い換えるならば、伝道の為には神の民を選び、用いられたということです。ですから、私達が、キリスト者として選びに与り、立てられているのは、神様が伝道の為には祝福し、用いられたのです。キリスト者には、福音宣教への豊かな選びと招きがあり、その内には伝道への豊かな可能性を託していると、主は言われるのです。けれど、私達は、キリスト者として神様から賜っている、その豊かな可能性を忘れてしまっています。神様からの賜物というのは、引き出しの中にしまいこんでいると、どんどん失われてしまうのですが、それを用いるなら、益々輝きを見せるのです。

今日の聖書では、パウロがコリントの町に伝道し始めたある夜に、幻の中に主の言葉、「恐れるな、語り続けよ。黙っているな。…この町には、わたしの民が大勢いる」を聞きました。パウロは、この言葉に大いに励まれ、信じ、コリントの町に1年半も滞在して、コリントの教会を造り上げたのです。「恐れるな、語り続けよ」と、主が励まされているように、パウロがコリントの町に来た時には、恐れていたのです。いったい何を恐れていたのでしょうか。この事は、パウロのように伝道の業に専念したものでなければ知ることの出来ない恐れがあったと思います。

パウロのこれまでの伝道の歩みを振り返って見ますと、様々な困難な問題や、状況に直面して来ています。この伝道旅行も出発時に、盟友であったバルナバと意見が決裂して別れ別れになってしまいました。そして、第一回目に伝道した小アジアを訪ねながら伝道していった時に、アジアで語ることを聖霊に禁じられたのです。また、予定のコースを進んで行くと、イエスの霊がこれを許さなかったというように、計画を変更せざるを得ませんでした。そこで、彼はついにアジアでの伝道を断念して、ヨーロッパへと渡って行くのです。ヨーロッパでの伝道も一応の成果をおさめようとする時、常にユダヤ人の迫害にあい、落ち着いて伝道出来る状態ではありませんでした。ある時は、石で打たれ、死んだと思われて町の外に放り出された事もあります。そして、アテネという、誇り高いギリシャ文化の町で、知恵をつくして説教したのですが、人々の反応は極めて冷ややかで、ある者はあざ笑い、またある者は「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と言って、あっさり引き上げてしまい、「何人かが信じたただけであった」というのです。その後、パウロはやむなくコリントの町にやって来たのですが、パウロの伝道旅行において伝道の全てを賭けた、最後の砦としてのコリントの町でした。しかし、コリントとの町においても、ユダヤ人達の迫害はいっこうに変わらず、ついにユダヤ人伝道を諦め、異邦人伝道へと向かって行った、ある夜に幻を見たのです。

この様なパウロの伝道の足跡を見る時、パウロの恐れというのは、一様ではない事が想像されます。伝道には不安と恐れが常に同居しています。思い上がった時には聖霊によって禁止されることもあります。けれど、道を失ったと思えたこの時、パウロは、幻の中に道を示されて、また起き

上がったのです。「この町には、わたしの民が大勢いる」と言われたパウロにとって、この言葉は、どれほど大きな励ましと力になったことだろうかと思います。救われるべき大勢の人々を、神様は用意してくださり、あなた方の働き、すなわち教会の働きを待っていると。救いを待っている人々が大勢いるというのです。そして、この釧路に教会が主によって建てられているという事は、その救いを待っている人々の為に、神様が選ばれたのであり、その力をも備えて下さっているのです。

私達の教会は、ベトザタの池の側で、「いつか、誰かがしてくれるだろう」と、三十八年間も人を頼りにして、床を持って来てまでも横になっていた病人のようになってはならないのです。それは、死を待つだけなのです。イエス様は、そのような、病んでいる人に向かって、「良くなりたいのか」と言われます。その時病人は、周りの様々な条件を持ち出し、「わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。」と、つぶやいています。それに対して、イエス様は、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」と言われました。すると、その病人はすぐに良くなって、床を担いで歩き出しました。私達が本気で歩き出すと、その力は与えられているのです。神様は、備えて待っておられるからです。

「信仰とは、手に松明を持って歩き出すようなものである。」と、言われています。行く手がどんなに暗く、闇に覆われていても、松明を手にして、まず第一歩を踏み出すならば、次の踏むべき一歩が照らし出されるという事です。私達は、福音の光を手にも、まず第一歩を踏み出さなければ成りません。すると、私達の知りえなかった、主が備えておられる恵みに出会うのです。主が備えておられる、大勢の民に出会うのです。

釧路教会牧師

青砥 好夫